

約 40 年前には、「実習育児学（千羽喜代子他）」がこの日本小児医事出版社から出版され、乳児院や保育所の実習バイブルとして長らく愛用されてきました。

その後、保育環境が大きく変わり、改めて保育所・幼稚園における実習生のテキストとして、本書の前身である「実習保育学」が 13 年前に編集され、保育を目指す実習生の教科書として、実習生のみならず保育現場で実習指導にあたる保育者（保育士・幼稚園教諭など）にも役立つテキストとして活用されてきました。

この度、この「実習保育学」の精神を伝承しつつ「実践保育学」として、実習生のみならず、保育園・幼稚園で保育に携わっておられる保育士や幼稚園教諭の保育実践書として改編させていただきました。

この 13 年間に、例えば平成 20 年には保育所保育指針改訂並びにその解説書が施行されています。また、幼保一元化への歩みも進展し、3 歳児以降の認定子ども園のみならず、3 歳未満児をも対象とする幼稚園・保育園連携型認定子ども園も平成 27 年に発足することになっています。このような保育環境の変化を受けて、保育を通して子どもの健やかで豊かな育ちをいかに支えていくか、子どもに寄り添い、悲しみや喜びを分かちあえる保育者をめざして歩んでいける実践書として役立つことができればこの上もない喜びです。

以下に本書の特徴を紹介しましょう。

I. 「保育の実践現場に立つとき」では、多様な専門職やボランティア等が入りする開かれた保育所、そしてそこでの実習やボランティアとして保育現場に参加することの意味、幼稚園や保育所、認定子ども園などの特徴や役割、そして子育て支援は子育て支援の役割をも果たすという意味について考えていきます。

II. 「保育の実際」は、0 歳児から 5 歳児までの年齢ごとの保育並びに異年齢児保育について、子どもの姿と保育者の役割、そして子どもを観る視点を明らかにしています。また、子どもへの関わり方のポイントをエピソードとして挿入しつつ、保育者はもとより実習生も理解を深めていかれる内容として構成しています。保育現場でいかなる保育をすればよいのか、それは同時に現場サイドに立った実習指導のポイントともなるものです。

Ⅲ. 「赤ちゃんの基本的なケア」においては、保育者や、実習生が初めて接する赤ちゃんへの保育をどうすればよいか、そのノウハウが「抱っこ・おんぶ」「授乳」「おむつ交換」など基本的な 10 項目について丁寧に記述されています。乳児保育が一般化され、どの保育園でも取り組む課題となっていることを反映して、乳児保育への理解を一層深めることのできる内容に配慮しました。

Ⅳ. 「配慮を要する子どもの保育」では、虐待をはじめ、注意欠陥多動性障害や広汎性発達障害、アタッチメント障害等の処遇が困難となりがちな子どもたちへの対応等、理解を深めます。また、多様な保育形態、例えば長時間保育や病児・病後児保育等についてもその実際と保育への留意点についても学びます。

Ⅴ. 「乳幼児の健康と病気・事故予防」では、まず、保育者の専門性として「保育看護の専門性」について考え、看護師がいない場合にどのようにその課題を達成していくかも含めて考えていきます。その上で、発育や発達への基本的な知識、個別的な関わりを大切に、愛着関係を育むことがなぜ大切なのか、人格形成に大きく影響する子どもの心の育ちへの理解を深めます。また乳幼児の栄養・食事について理解し、健康状態の見方も学びます。一方、各種の感染症への理解と予防対策、発熱、嘔吐、下痢などのありふれた症状からみた病気への理解、対応を深めます。乳幼児の事故、ヒヤリハット等の実態やリスクマネジメント、そして、けが等への応急手当や人工呼吸や心臓マッサージ等の手技を学びます。

このように、保育園と幼稚園とが統合されつつある今日、保育士や幼稚園教諭にとって、そして実習生にとっても具体的で役立つ内容で構成されています。本書が、心豊かな子ども達を育むことのできる「保育者」の生き生きとした育ちをも支援することができれば幸いと願っています。

平成 26 年 3 月